

多義語における意味の出現の定量

石井 久雄 (同志社大学文学部)

出現頻度に、整数でない小数・分数を持ち込む、ということを試みます。

それを試みた結果として知りたいのは、多義語における、それぞれの意味の出現頻度・比率です。この目標を見る限りでは、小数・分数を持ち込む必要性がどこにあるかと思われるでしょう。用語が出現する一回ごとに意味を決定し、該当する意味に頻度を一つずつ積み重ねてゆけばよい——はずであるからであり、その出現頻度に小数も分数もあったものではありません。問題がしかしあって、意味を決定するところ、あるいは決定のために意味の枠を設定するところです。意味がいずれであるか決定できないときに、一つの出現を意味幾つかに分配するような操作をすると、小数・分数が顔を出すことになります。

意味が決定できるように本文を読み込むこと、あるいは意味を記述する枠を組み換えること、それが正道であるでしょう。しかし、先に進むために、妥協があってもよいのではないか。あるいはむしろ積極的に用語の一回の出現に意味が幾つか重なることもあると、別の道を踏み分けてもよいのではないか。そのようなことを考えてみたく思います。

—— 問題の発端

実例を挙げます。蜻蛉日記です。本文は、以下、次によります。

木村正中・伊牟田経久校注・訳『蜻蛉日記』 (菊池靖彦・木村・伊牟田

『新編日本古典文学全集 13 土佐日記 蜻蛉日記』, 1995年, 小学館のうち)

開巻は次のようです。このうちの用語「世の中」を取り上げます。

- ・ かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり。……、世の中に多かる古物語のはしなどを見れば、世に多かるそらごだにあり、…… (p.89)

現代語訳は次のようになっています。初めの「世の中に」の訳語が見当たりません。

- ・ 過去半生の時間がこんなにもむなしく過ぎて、まことに頼りなく、どっちつかずのありさまで暮している女ひとがあった。……、世間に流布している古物語の端々をのぞいてみると、ありきたりのいい加減な作り事でさえもてはやされるのだから、……

この原文の初めの「世の中に」については、直後の「世に」についてとともに、次の注釈が詳しく、現代語訳も併せて見てみます。

柿本奨『日本古典評釈・全注釈叢書 蜻蛉日記全注釈』, 1966年, 角川書店。

- ・ 紆余曲折した半生を過して、頼りなく、どっちつかずの身で暮している女がいたとってください。……、世間にたくさん出ている昔物語の片端などをのぞくと、ありふれた作りごとでさえ、ついてゆけないのに、……

「世の中に」 — 「ありけり」へかかる。

「世にふる人ありけり」 — 「世に」は「ふる」にかかる、というより「世にふる」で一語のように使われている。「世」は世間の意、したがって「世の中に」「世に」と意味の類似した語があいついで現われており、書きことばとしての批評をするなら、推敲不足といえよう。大西善明氏（『平安文学研究』20，昭和32年9月）のいわゆる「重ねことば」、木村正中氏（『国語と国文学』36.3，昭和34年3月）のいわゆる「近接同語」で、『宇津保物語』その他ではしばしば見えるから、この当時のことばづかいのくせでもあろう。（上 pp.13-14）

この柿本注は妥当であると考えます。しかし、木村・伊牟田訳が、原文「世の中に」に当たるところに「まことに」と置いているのも、棄て難く思われます。副詞「世に」を想起しつつ「世の中に」に副詞を見ることは蛮勇でしょうが、初めの「世の中に」に2分程度の副詞性を見たくもあります。なお、今井卓爾『蜻蛉日記 訳注と評論』（1986年、早稲田大学出版部）は、この「世の中に」を「あの人との仲については」と訳し、それは十分にありうる2分であるでしょう。

つまり、初めの用語「世の中」の意味は、「世間」8分、副詞あるいは「夫婦仲」2分である、といった見かたがあつてよいということです。

#### —— 問題の共有

用語「世の中」の、蜻蛉日記冒頭におけるいま一つの出現は、意味「世間」10分のようにですが、木村・伊牟田注は、次のように言います。

ありきたりの、陳腐な、といった含みがあり、次の「世に多かる」と同語の反復によって、それが強調される。

木村・伊牟田注は、全般的に、意味の重なりを積極的に捉えています。すなわち、別のところ、「世の中の人のやうならぬを」について、「世の中の人」に次のように注釈し、通説では「世間一般の人」ととる。それでもよいが、「世の中」は夫婦仲で、内情は人並に夫婦などと言えたものではない、の意か。（p.147）

また、さらに別に、段落幾つかが大きくまとまった段の鑑賞・批評として、

兼家像のみごとな客観的造型は、同時にそれに対応する作者自身の存在感を、しめやかに語るのだが、そのしめやかな存在感は、また風景に接して、きわめて格調の高い自然感的情绪を生み出す。本段に二度繰り返され、次段にも受け継がれる「世の中あはれなり」という感懐における「世の中」とは、このような人間界と自然界とを総合した世界である。（p.277）

これを受け、「世の中いとあはれなり」とあるうちの「世の中」の注釈として、

自然界と人間界を総合した「世の中」（→277ページ）。ここはしみじみと厳しきや不安がつもの。（p.352）

というように記しています。

用語の一回の出現に意味が重なるということ、認めることにします。蜻蛉日記に「世の中」は26例あり、意味で次のように分けられるでしょう。このうちの下2行で、意味を重ねて見えています。最初の「世の中」に見た副詞は、ここでは諦めました。

意味	例数	例文	
・ 現世	3	世の中に、心なげなるわざをやしおかむ。	(p.219)
・ 世間	10	世の中いと騒がしかなれば、	(p.192)
・ 境遇	2	世の中いとはかなければ、	(p.282)
・ 威勢	1	世の中いよいよさかえののしる。	(p.308)
・ 夫婦仲	4	命はべらば、世の中は見たまへてむ。	(p.345)
・ 外界	1	九月になりて、世の中をかしからむ、	(p.149)
・ 現世 境遇	1	世の中をはかなきものと	(p.152)
・ 世間 外界	4	世の中あはれに心細くおぼゆるほどに、	(p.277)

#### —— 出現の定量化

意味が重なって出現するということ、認めるならば認めたで、それを定量的に表現する方式をもたなければなりません。方式は幾つかありうると思います。用語の出現頻度1を意味幾つかに分配すると、当然に意味の出現頻度は小数・分数になります。

出現頻度は、絶対的には自然数であるべきでしょう。しかしながら、われわれは、その絶対的な出現頻度から算出された、相対的な出現比率とか正規化とかで、むしろ、専ら小数・分数による表現を行うことになっています。絶対的な出現頻度も、延べを分母とする分子であり、やはり相対的な表現のその特異なものである、という見立ては、屁理屈でしょうが、出現頻度に小数・分数を持ち込む抵抗感を和らげる助けになるかもしれません。

さて、意味の重なりを定量的に表現する**第一の方式**として、意味が単独で出現した頻度の比率に従って、意味が重なって出現した頻度を分配する、というものがありえます。意味が重なって出現したときには、その意味の濃淡は、全体における意味の出現の様相を反映する、と考えるものです。蜻蛉日記の用語「世の中」では、次のようになります。小数は第1位に止めます。

意味‘現世’および‘境遇’が単独では出現頻度3および2であり、

重なった出現頻度1でもその比率0.6 : 0.4が保持されて、

意味‘現世’の合計出現頻度  $3.6 = \text{単独 } 3 + \text{意味‘境遇’との重なり } 0.6 \times 1$

意味‘境遇’の合計出現頻度  $2.4 = \text{単独 } 2 + \text{意味‘現世’との重なり } 0.4 \times 1$

意味‘世間’および‘外界’が単独では出現頻度10および1であり、

重なった出現頻度4でもその比率0.9 : 0.1が保持されて、

意味‘世間’の合計出現頻度  $13.6 = \text{単独 } 10 + \text{意味‘外界’との重なり } 0.9 \times 4$

意味‘外界’の合計出現頻度  $1.4 = 1 + 0.1 \times 4$

**第二の方式**として、重なったものは対等であるとみなして、意味二つが重なったならばそれぞれ出現頻度0.5、三つが重なったならばそれぞれ0.33、というようになります。蜻蛉日記の用語「世の中」では、次のようになります。

意味‘現世’の合計出現頻度  $3.5 = 3 + 0.5 \times 1$

意味‘境遇’の合計出現頻度  $2.5 = 2 + 0.5 \times 1$

意味‘世間’の合計出現頻度  $12.0 = 10 + 0.5 \times 4$

意味‘外界’の合計出現頻度  $3.0 = 1 + 0.5 \times 4$

**第三の方式**は、用語の出現一つごとに、重なっている意味の比率を、合計が1となるように分配します。比率は主観的です。蜻蛉日記の用語「世の中」では、次のようにし、

意味‘現世’‘境遇’の重なりで  $0.9 : 0.1$

意味‘世間’‘外界’の重なりで  $0.4 \sim 0.6 : 0.4 \sim 0.6$

結果として、意味ごとの合計出現頻度は、次のようになります。

‘現世’  $3.9 = 3 + 0.9$       ‘世間’  $12.0 = 10 + 0.4 + 0.5 + 0.5 + 0.6$

‘境遇’  $2.1 = 2 + 0.1$       ‘外界’  $3.0 = 1 + 0.6 + 0.5 + 0.5 + 0.4$

意味の出現を定量する方式は、まだあるでしょうが、以上の三つについて特徴を見るならば、次のようになります。すなわち、**第一の方式**は、意味が単独で出現したものの全体が分からなければ、計算できませんが、それが分かれば、直ちに、意味が重なった出現を含めた全体像が分かることとなります。ただし、単独で出現せずに重なりの中にのみ出現した意味がある、そのときには全体の計算ができません。

**第二の方式**は、意味の重なり具合に濃淡があることについて、楽観的です。重なりがあちらこちらと随所があれば、それぞれに濃淡はあっても全体で相殺されるであろう、といった想像をしていることとなります。出現頻度の大小は、第一の方式に比べて縮小されることとなります。

**第三の方式**は、同じ二つの意味の重なりでも、こちらの出現とそちらの出現とでは濃淡が違うとか逆であるとか、記録してゆくこととなります。第一の方式と違って、全体を知らなくとも、部分のみを取り上げて意味の重なり濃淡を言うことができます。第二の方式に比べて、主観的ながら緻密です。この発表でも、問題の発端から意味何分と言ってきたのは、この第三の方式によっていたこととなります。

#### —— いま一つの事例

事例をいま一つ挙げます。「世(よ)」です。概略は次のようです。例数欄は、意味の重なりそのまま集計した出現頻度、合計欄は、意味の重なりを分離したものです。ただし、意味の重なりはいずれも0.5ずつとし、下4行の合計欄の出現頻度は、意味‘様子’‘形式1’‘形式2’‘形式3’のものです。

意味	例数	合計	例文	
・ 一生	1	1	玉の緒の絶えみ絶えずみよをや尽くさむ	(p.318)
・ 時間	2	2	心のとくる世なきに、あれまさりつつ、	(p.105)
・ 時世	1	1	かかる世に、中将にや三位にやなど、	(p.154)
・ 前世の因縁	1	1	いかなる世に、さだにありけむと	(p.259)
・ 俗世		0.5		
・ 世間	11	11	さなりたるべしと、世にも言ひ騒ぐ心づきなさに	(p.216)
・ 暮らし	1	1.5	おほかたの世のうちあはぬことはなければ、	(p.103)
・ 夫婦仲	4	4.5	いと思はずにのみぞ、世はありける。	(p.129)
・ 前例		0.5		
・ 天下		0.5		
・ 俗世 夫婦仲	1		かたちを変へて、世を思ひ離るやとところみむ	(p.201)
・ 様子 暮らし	1	0.5	かかる世をもとひたまはぬは、	(p.199)
・ 形式1 前例	1	0.5	ついたちの日は見えずしてやむ世なかりき。	(p.216)
・ 形式2 天下	1	0.5	世に道しもこそはあれ。	(p.109)
・ 形式3	1	1	松山のさし越えてしもあらし世を われによそへて騒ぐ波かな	(p.156)

実は、「世」には、このほかにも、次のように用言と結びついた句があり、

「世を憂」1例	「世に無し」1例	「世に久し」1例	「世に多し」1例
「世に侍り」2例	「世を捨つ」1例	「世を経」1例	「世の常」2例
「世に経」4例	「世に交らふ」1例	「世とともに」1例	「世に旧る」1例

また、名詞「この世」や副詞「世に」がありますが、ここでは計算結果を簡明に見るために、取り込んでいません。

「世」の意味の設定には、形式名詞を想定することになりました。「世」の形式名詞というものは、国語辞典・古語辞典などに上がっていません。意味の重なりを認めたくらば、このような操作をすると、意味が拡散し、収集できなくなるかもしれないという自戒として、残しておくこととします。なお、その用例の木村・伊牟田訳は、次のとおりです。

- ・ ‘形式1’ 元日に顔を見せずじまいになる時はなかった。
- ・ ‘形式2’ 道はいくらでもあるのに。(訳語なし)
- ・ ‘形式3’ あの人がそちらへお訪ねしても、私が気にするはずはございませんのに、……あの人は、自分の浮気心にひきつけて気をまわすのでございます。

#### —— 基礎的な問題

意味が重なって出現し、それを定量することについて、基礎的な問題二三に触れます。

意味が重なるといっても、その重なったまを一つの意味であるとするならば、重なるという事象および表現をしないで済ますことができます。例えば、「世の中」で、二つの意味‘世間’‘外界’が重なりとしましたが、二つを統合した意味‘人を取り巻く社会・自然などの全体’を設けるならば、その一つの意味であると処理することができます。意味を統合したり分離したりすることができることは、用語の出現頻度1に対して意味の出現頻度も合計1にすべきであるということの理由になると考えられます。

意味の統合・分離について、用語一般に妥当するような規準を見出すことは、非常に困難であるように思われます。ある一語についてならば、用例の多寡なども考慮しつつ、多作品にわたる意味の体系を設けることができ、実際に語史の研究や辞典の記述で実行されています。しかしながら、一作品のなかの類義語にすらその体系の規準を及ぼすことができそうにないとは、類義語「世の中」「世」から想像するところです。

意味が重なるということは認めるとしても、一語のうちの意味について言うべきことであると考えます。このことから逆に見るならば、どちらの意味であろうと迷う範囲に入る意味の群がりには、一語のうちに属してよく、その群がりや仕分けされて一語が多義になる、ということになります。用語「世の中」が、人間社会を意味する一語と、自然界を意味する別の一語とに分かれないのは、その意味が重なって出現しうるからであると、倒錯的ながら理解することになります。

同音の別語を重ねて使用することは、古典では懸け詞として知られます。蜻蛉日記でも和歌にふんだんに見ることができますが、ただ、用語二つの重なりでは、出現頻度を分配しようという気にはなっていません。音韻の流れでは1語であるが、文法・語彙としては2語であると数える、といったことも、あってよいかと思えます。音韻・語という離散的な単位では多重に数えることができ、意味という、隣接者との境界が定かでない非単位的なものでは、一つとしか数えられない、といった感覚かと思えますが、自分でも分かりません。なお、比喻は、意味の出現頻度のうちに取り込むつもりが、いまのところはありません。

話を終えることにします。意味の重なりでの定量的表現を試みたつもりでしたが、意味はどのようなものであるかと常に考えていなければ、その表現も得られないようです。

—— 付記

この発表は、次の助成を受けたものです。

JSPS 科研費 25370531 「蜻蛉日記全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」  
また、次の2件の成果を踏まえています。

JSPS 科研費 22520478 「とはずがたり全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」

JSPS 科研費 20652033 「古典文芸作品の用語の語義別出現頻度に関する調査研究」